

戦前における手工科の中等教員検定試験について(4)

宮崎擴道*・澤本 章・平田晴路**

A Study on The State Examination for Secondary School Teachers of
Mmanual Arts in Pre-War Japan (4)

MIYAZAKI Hiromichi, SAWAMOTO Akira, HIRATA seiji

(Received September 27, 2013)

1. はじめに

本稿は戦前の手工科に関わる中等教員検定試験制度研究の第4報である。

戦前において中等学校の教員となるための方途は、基本的には官立学校の高等師範学校による直接養成および指定校、許可校による無試験検定があったが、その外に第3の方法として文部省の教員検定試験に合格する道があった。教員検定試験には高等学校高等科教員検定試験、師範学校中学校高等女学校教員検定試験および実業学校教員検定試験があったが¹⁾、これらの検定試験の内、師範学校中学校高等女学校教員検定試験を文検と俗称した。文検は指定校、許可校などの学校に依らない独学を前提とする中等教員の養成制度であり、ある意味で開放的な教員養成制度であったと云える。そして戦前の複線型学校体系の中で初等学校教師に対する中等学校教師への復帰コースとなっていた。

文検の試験内容は高等師範学校レベルとされその合格率は低く、一面、学校による養成よりも難関であったとさえ云われる。前報までに文検手工科の予備試験と本試験の出題分野と出題領域、出題内容などを分析し、さらに予備試験の製図、図案や本試験の実技の具体的内容を明らかにし報告しておいた。引き続き本稿では予備試験と本試験の実施要領、試験の実状や成績査定の内実など受験者最大の関心事である受験情報を中心に考察した。

2. 文検手工科の実際

2-1 実施の要領

文検は教員検定規定の「教員検定ハ受験者ノ学力、性行、身体ニ就キ之ヲ行フ」に基づいて行われ、その出願手続きは教員検定願書、履歴書、証明書(学校卒業証明書または教員免許状授与証明書)、身体検査書を地方庁に提出した。予備試験は各地方庁の所在地で本試験は東京で行われたがそれぞれの試験日は特定されておらず、試験日程はその都度官報により周知される仕組みで、予備試験の実施学科名は官報の告示欄に、また予備試験、本試験の実施日や注意事項は広告欄に掲載された。

試験は教科によっては予備試験、本試験とも年2回行われたが手工科は年1回であった。手工科は予備試験と本試験の別がなかった一元化の時代では2-6月に、予備試験と本試験の分離された時代に入ると当初は予備試験は8月、本試験が11月のパターンであったが、第36回あ

* 山口大学名誉教授 ** 岡山大学教育学部

表 1 試験日程例

①試験実施科目の発表																
<p>文部省告示第四二号²⁾ (前略) 教員検定ニ関スル規程に依リ左ノ学科目ニ就キ師範学校中学校高等女学校教員検定試験ヲ施行ス 受験者ハ本年五月十五日マテニ同規程第四条ニ依リ願書ヲ地方庁ニ差出シ地方庁ハ六月十日マテニ当省ニ進 達スヘシ (中略) 前項ノ願書ハ七月十一日以後当省ニ到達ノ分ハ之ヲ受理セス試験施行ノ期日は教員検定委 員会会長之ヲ公告ス (中略)</p> <p>試験学科目 修身 教育 国語及漢文 英語 仏語 独語 歴史 地理 数学 物理及化学 博物 法制及經濟 習字 図画 家事及裁縫 体操 音楽 簿記 農業 商業 手工</p>																
②出願者注意の発表																
<p>師範学校中学校高等女学校教員試験検定出願者注意³⁾ (中略)</p> <p>一試験検定ハ左ノ二種ニ區別シテ行フ 第一種師範学校、中学校教員志願者 第二種師範学校女子部、女子師範学校、高等女学校教員志願者 (中略)</p> <p>一図画、裁縫、体操、音楽、手工科ノ予備試験ニ於テハ左記ノ資格ヲ有セサル者ニ限り当該学科ノ外ニ国 語ヲ課スルモノトス但シ第一種ニ在リテハ師範学校又ハ中学校第二種ニ在リテハ高等女学校ノ卒業ト同一ノ 程度ニ拠ル 一師範学校卒業者 一中学校卒業者 一高等女学校卒業者 一小学校本科正教員免許状所有者 一小学校准教員免許状所有者 一尋常小学校本科正教員免許状所有者 (後略)</p>																
③予備試験日程の発表																
<p>教員検定予備試験日時割⁴⁾ 本年二月文部省告示第四十二号ニ依リ施行スヘキ師範学校中学校高等女学校教員検定予備試験日時割左ノ 通相定ム受験者ハ出願学科試験開始ノ前日マテニ其願書經由ノ地方庁ニ就キ指示ヲ受クヘシ但シ東京府ヲ經 テ出願シタル者ハ文部省ニ、又受験地変更ノ許可ヲ受ケタル者ハ受験地ノ官庁ニ就キ指示ヲ受クヘシ (中略)</p> <p>師範学校中学校高等女学校教員検定予備試験日時割表 (第二十一回) (前略)</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th>学科目</th> <th>時間</th> <th>月日 (曜)</th> <th>時限</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>手工</td> <td>五</td> <td>八月二十四日 (火)</td> <td>午前七時ヨリ正午十二時マテ</td> </tr> </tbody> </table> <p>(中略)</p>	学科目	時間	月日 (曜)	時限	手工	五	八月二十四日 (火)	午前七時ヨリ正午十二時マテ								
学科目	時間	月日 (曜)	時限													
手工	五	八月二十四日 (火)	午前七時ヨリ正午十二時マテ													
④予備試験合格者の発表																
<p>教員検定試験予備試験合格者⁵⁾ 本年八月十六日乃至同三十一日施行ノ師範学校中学校高等女学校教員検定予備試験中來ル十一月本試験施 行ノ学科ニ於ケル合格者ノ族籍、氏名等左ノ如シ但シ家事及裁縫科ヲ除キ氏名ノ上ニ※印アルハ師範学校女 子部、高等女学校ノミノ教員志願ナリ</p>																
⑤本試験日程の発表																
<p>教員検定本試験日時割⁵⁾ 師範学校、中学校、高等女学校教員検定本試験日時割 左ノ通定ム 受験者ハ其学科試験開始ノ前日マテ ニ文部省ニ出頭シテ指示ヲ受クヘシ 師範学校中学校高等女学校教員検定本試験日時割表 (第二十一回) (中略)</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th>学科</th> <th>時間</th> <th>月日 (曜)</th> <th>時</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>手工 実地</td> <td></td> <td>(十一月) 十三日 (水)</td> <td>午前八時ヨリ</td> </tr> <tr> <td>手工 実地</td> <td></td> <td>同 十四日 (木)</td> <td>同</td> </tr> <tr> <td>手工 実地</td> <td></td> <td>同 十五日 (金)</td> <td>同</td> </tr> </tbody> </table>	学科	時間	月日 (曜)	時	手工 実地		(十一月) 十三日 (水)	午前八時ヨリ	手工 実地		同 十四日 (木)	同	手工 実地		同 十五日 (金)	同
学科	時間	月日 (曜)	時													
手工 実地		(十一月) 十三日 (水)	午前八時ヨリ													
手工 実地		同 十四日 (木)	同													
手工 実地		同 十五日 (金)	同													
⑥本試験合格者の発表																
<p>教員検定本試験合格者⁶⁾ 去月十九日施行ノ師範学校中学校高等女学校教員検定本試験ニ合格セシ者ノ族籍、氏名等左ノ如シ</p>																

たりからは予備試験は4-5月、本試験は7月の実施が恒例となった。

予備試験の約一ヶ月後に予備試験合格者が官報の広告欄に発表掲載され、通常その数週間後に本試験の日程が告示された。本試験の出願場所は文部省内教員検定委員会事務所でこのとき受験票が渡された。本試験の合格発表は本人への直接通知は無く試験後の数週間内に官報の広告欄に掲載された。こうした文検の年間の試験日程を明治40(1907)年の例についてみると表1のようである。

なお明治39-41年の予備試験の「出願者注意」には手工科および図画、裁縫、体操、音楽の各科では特記事項として、師範学校卒業者や尋常小学校本科正教員資格所有者以外の受験者に対しては学科の試験の外に国語を課していた⁷⁾。明治39年(第20回)の例では手工科では21名が国語を受験したが、「図画外四学科予備試験二属スル国語試験成績」によると対象者6名のうち2名が合格している⁸⁾。

2-2 試験の実施

文検手工科の実施形態は予備試験は筆記、本試験は実技と口述試験で、出題範囲は①教育思潮と教授法、②加工技術関連の知識、③製図と図案、④実技でこれらが予備試験と本試験に分けて出題された。

1) 予備試験

手工科の予備試験日程は明治年間では試験時間が5時間の例もみられるが、一般的には4時間であったと思われる。また出題は4問が定着しており、その解答は各設問ごとに仕分けして提出した⁹⁾。予備試験の出題傾向は試験が予備試験と本試験に分けて実施された分離時代では、教授法では教科理論に関連するものと教育方法に関連するものが出題対象になったが、教育方法に関するものが約90%と圧倒的に多く、またその内容は教材排列、設備関連、教育法がほぼ同等で出題されている¹⁰⁾。製図は展開図が約43%と最多でその他に工作図、断面図、実形図などが出題され、図案では家具関連が約76%と圧倒的に多かった¹¹⁾

この予備試験については昭和4(1929)年当時、東京高等師範学校図画手工科副手の立場にあった小野義吉(第44回合格)は、出題は①手工科と教育思潮との関係、②手工科の工具工作法材料等に関係した問題、③理論製図(応用的用器画)に関係した問題、④実用製図(実用的図案)に関した4分野の問題が一般的な傾向であるとしている。そして①は比較的解答しやすい分野だが「受験者が如何なる意見を持ってゐるか、其の能力を検す」のが目的だから、詳述するよりポイントを押さえた簡潔適格な解答に努めること。また必ずしも試験委員など学説に論拠を求めなくても、「己の信念に従って終始条理が一貫」したものであれば「其の意見発表は力強く思ってよからう」とも付け加え、要は参考書の暗記ではなく「常に確固たる自己の教育観を保持」しておくことだ。②は実際的な技能に関連するもので受験者の実地の技量を試すものである。従って書籍的知識よりは体験的な知識をしかも比較的詳細に記述する方が「平素の修養程度がよく何はれ答案も貴重」なものになるはずだ。③は断面図、展開図などの作図理論に基づく製図の問題であるが、その成績不振は受験者に「平素割合に本科の研究が不足」しているためであり、参考書などによって「真面目に其の原理原則を研究」しておけば必ず解答できるものだ。④は製作品についての図案であり、製図法に基づく厳密な作図が求められるわけではなく、出題の対象によって三面図や二面図など表現方法は臨機応変に対応すればよい。図案と表現しているが単なる美的なデザインが求められているわけではなく、多少装飾的な部分を加味するとしても、あくまで「実用品の図案」であり「堅牢の構成法」を解答するべきで、

「単に美だけに拘泥」したものは手工科の図案としては「何の価値もない」などと解説している。

2) 本試験

本試験は原則的に第19-24回は木工、金工、粘土細工の実技試験、第25-76回は木工、金工、粘土細工の実技試験および口述試験の形式で行われた¹²⁾。受験受付期間は第42回（大正14年）の例では「本月二十九日ヨリ出願受科試験開始ノ前日（日曜日ヲ除ク）マテニ正午八時ヨリ午後二時（但シ土曜日ハ正午）」とされ6月29日から7月16日であり、手工科の試験日時は7月17、18、20日の9時開始となっていた¹³⁾。手工科の本試験会場は東京高等師範学校手工教室で第一日目は木工、第二日目は金工、第三日目は粘土細工で、口述試験は第三日目の粘土細工の試験の間に行われた。それらの時間配分は一般的には木工は6～9時間、金工は5～7時間、粘土細工は3～3.5時間、口述は10分以内、普通は3～5分間程度であった。

第68回（昭和13年）の例では木工7時間、金工7時間、粘土細工4時間、口述は5分間が割り当てられている。なお実際の試験は設備や試験場スペースの関係から受験者は2組に分けられ、例えば1日目の午前に木工、午後金工を受験した者は2日目には午前に金工、午後は木工を受験する方法が採られた¹⁴⁾。また金工で2題の出題がある場合には更に課題別に受験者を2組に分けて作業を進めた。口述は粘土細工の試験時間中に抽選番号順で順次行われていた。また昼食時間は15～20分と比較的短時間であったと思われる¹⁵⁾。

試験時間の実際は試験委員の阿部が「各細工は遅い早いに依つて、各細工は時間の融通が出来る様になつています」と云うように¹⁶⁾、木工・金工間では製作時間に余裕が生じれば他の試験科目に流用できる仕組みであった。例えば第54回（昭和6年）の本試験は木工7時間、金工7時間の割り当て時間であったが、北風伊三郎（第54回合格）は木工は割り当て時間内に完成できなかったものの、金工の余り時間を流用し計10時間を費やして成績物を完成している¹⁷⁾。

なお口述試験は手工科の場合は本試験で同時に実施されたが、国語科など教科によっては本試験の合格者に対して口述試験の受験資格が与えられたため、その合否を文部省で確認する必要があった¹⁸⁾。

こうした本試験実施の実状や試験の要領は次のようである¹⁹⁾。

木工では抽選によって受験者の作業台が決められ、問題は試験委員が直接板書で示したうえ注意点を説明している²⁰⁾。与えられた材料を用いて指示された課題品を作成するが、出題によっては製作品標本が示されることもあり、その場合は標本を参考に模倣的に作業を進めた²¹⁾。

工具は試験年度によっては貸与される場合があり、第48回（昭和3年）の例では新品が用意されている。第50回（昭和4）の例では独用工具と共用工具に区別され、前者は各作業台に配付され後者は一定個所に置かれ必要に応じて自由に使用できた。ただ貸与される工具は必ずしも整備が万全ではなく、「鉋ばかりは至極不正確で、台がくるつて居る。刃先はさびて殆んど用をなさぬ」と使用に際しては整備も必要であったようである。こうした場合には受験者も「受験者に其の修理をさせることは、大に意味のあることゝ想像される」と試験内容の一つと捉えていたようだ²²⁾。また工具は私物の持参が指示される場合もあった。例えば第56回（昭和7年）では「鉋三箇（荒仕工、中仕工、上仕工）・八寸鋸（縦横各一箇又ハ両刃鋸）・一分鎚鑿・二分向待鑿・四分薄鑿・五分尾入鑿・直角定規一箇・消ゴム・図引機械・尺度・三角定規・ピン・丁定規ヲ携帯スヘシ画板ハ之ヲ携帯スルモ妨ケナシ」とされている²³⁾。こうした場合には受験者は「大きな工具箱に指定以外の品まで詰めて、重い荷物を持ち」²⁴⁾と工具一式の収納された重い工具箱を持ち込むことになった。試験用の木材はセン、カツラ、スギ材などが一般的であつ

たが地方では入手が難しいような良材が用意されたと云う。それでも乾燥やねじれなど細かな点では当たり外れも免れず、これらについての技術的な対処法も評価の対象となったと思われる。また材料はたとえ作り損ねても再交付はなかった。

金工、粘土細工の試験もそれぞれ抽選など木工と同様の手順方法で行われ、試験室は金工は金工室、粘土細工は手工室であった²⁵⁾。

口述試験は最終日の粘土細工の試験中に抽選番号順に別室に出頭し、試験委員と対座して口頭試問を受けている。短時間の試験であったが「手工科の大御所二先生を前にして(中略)威圧されたのではないけれど、自分が左様に感ずる」²⁶⁾と受験者には緊張を強いられる時間だったようである。

2-3 試験の評価

予備試験は筆答、本試験は木工・金工・粘土細工の実技および口述試験で行われたが、それらの成績については予備試験では製図、本試験は金工が不良とされていた²⁷⁾。

(1) 予備試験

予備試験の成績は一般的傾向として実技に関する知識を問うものが最も優れ、教授法関連、製図、図案の順で悪かったが²⁸⁾、この内の製図と図案の成績如何が当落に大きく影響し²⁹⁾、とくに不合格の過半は製図の成績不良にあったと云う³⁰⁾。

教授法関連については岡山秀吉は「此の方の成績はいつの時でも比較的良い方である」³¹⁾と肯定的であるが、受験対策誌では学習経験のある師範学校出身者はともかくとして、独学者に関しては一一般的に教授法の成績が悪いと分析している³²⁾。

受験者の多くがつまり製図について岡山は、とくに「製図に対する知識は甚しく欠けて居る」³³⁾ため、「七八分はたしかに此の製図のために失敗するといつてよい」と製図が最大の難関であることを示唆し³⁴⁾、阿部七五三吉も「用器画に就ては例年成績が頗る悪るい」と述べている³⁵⁾。同様に伊藤信一郎も製図は「手工の検定の鬼門」である云う³⁶⁾。受験対策誌でも「手工科の基礎をなす重要部分であつて落第者を一番に多く産出する学科」であり、「成績如何が及落を作る分水嶺」となる³⁷⁾と解説され、製図は予備試験最大の難関であった。しかし前記小野副手は「問題としては例年を通して余り難解なものとは認められない」と問題そのものの難易度はさほど高くないと考えている³⁸⁾。製図の成績不振の背景について岡山は、「日本の工業が全く学術的でなく」ただ単に「器用にさへすればよい」と云う、当時の工業社会における技能偏重の風潮が影響したと指摘している³⁹⁾。手工教育においては工業常識の涵養、工業を中心とする科学的知識技能の育成を重視する岡山にとっては、正確な製図は「将来我国の工業の進歩を促すにはこれは必要」なもので、教師も具備すべき必須知識であった。また「製図は数学的のもの」であるが「受験者は数学の力が余りに貧弱」であると、受験者の数理的基礎学力の不足が成績不振につながることも指摘した⁴⁰⁾。この点については伊藤も製図は「相当に数理的の素養」を要するため「単に芸術的趣味のみを有する人には可成困難」だと解説している⁴¹⁾。

図案については伊藤は「製作の根基をなす極めて重要なもの」⁴²⁾で、美的要素が求められるものの製作を前提にしたデザインであり、いたずらに装飾に傾注せずに「適用と云ふことを十分に考へ」⁴³⁾、簡素でありながら好感を与える美的なものが要求されると云う。受験者手記でも「本科に出る図案は製作図案であるから実際をはなれてはならぬ」⁴⁴⁾と報告している。

この点について阿部は「図画科の図案と手工との間に大分間隔があります」と云い、中等学校の図画教育で扱う美的な図案とは異なり、「日常生活の必要なる家具、建築」をカバーする「広

い方面に於て實際図案の力」が求められるが、このギャップが成績不良の一因となると云う⁴⁵⁾。そしてその根源は中等学校での用器画軽視に起因すると云う⁴⁵⁾。当時の中等教育では用器画は図画科の中で扱われていたが、「用器画は（中略）製図として教へられて居ない」⁴⁶⁾と云う点を問題視して、「製図に就ては工業社会に用ひらるゝ形式⁴⁷⁾を心得」させるべきだと中等学校における製図学習の不備を指摘している⁴⁸⁾。

(2)本試験

本試験の成績について岡山は木工、金工、粘土細工の順に悪いとし、「本試験の落第の多くは金工の成績の悪るいため」と金工の不振を指摘したが⁴⁹⁾伊藤も同様の見解を示している⁵⁰⁾。

木工では伊藤は「書物を読むよりは充分に技術を練つて置く」⁵¹⁾とか、あるいは「正確且つ迅速に作るやうにすべき」と技能を重視しているが⁵²⁾、阿部はそれに加えて工具の使用、材料の用法、工作法などが科学的であるか否か、そして製作品の美的価値を評価の対象とするとした⁵³⁾。また岡山は「単に技術の上達如何を試みるのではなく、併せて技術の根拠たる学力や教育者たる素養を試みる」⁵⁴⁾と単なる技能的習熟度の査定に留まらず教師としての素養まで対象になると云う。このため作業中にも突然に材料の名称や性質、工具の構造などについて質問される場合もあり⁵⁵⁾、本試験中においても予備試験同様の心構えが必要だったようである。

金工でも同様に「実技の練習を重んずべき」⁵⁶⁾とされ「成形、鑄付、火造、鍛接、仕上等各方面の研究」を、「何度も何度もやつて熟練」⁵⁷⁾する必要があると技能は重視された。岡山は金工について当時の工業化進展に対応して、「今日の時勢からいふと金工は非常に大切なもの」であり、「手工科教育の目的の上に於ても金工は必要」であるとして⁵⁸⁾、製図と共に「我国現時の手工教育上忽諸に附することの出来ない重要な事項」⁵⁹⁾とその重要性を指摘している。この金工不振の理由の一つとして阿部は受験者の勤務環境に金工設備が整っていないことを挙げ、「実習の機会を捉へることの困難な為であるから無理もない」⁶⁰⁾と技能習得の機会が少ないことに理解を示している。岡山も同様の理解を示しながらも「師範学校又は実業学校あたりへ行つて特別に学ぶ」とか「鍛冶屋なり銅工屋なりへ行つて実習」することによって補うことも可能であるとして、「受験しようとする以上はこの位の覚悟は必要」であると文検受験の厳しさを云っている⁶¹⁾。実技の試験は実習機会が少ない独学者にとっては高いハードルとなり、技能習得のためには並々ならない努力と苦勞があったと思われる。

粘土細工の不振は地方における指導者の不足とそれに伴うデザイン力不足⁶²⁾が挙げられている。このため「已むを得ず寛大な取扱」⁶³⁾が行われ、「従来木工金工に比すれば多少大目に見られて来た」が、それもレベルの向上に伴い「漸次程度を引上げる必要がある」⁶⁴⁾と考えられるようになり、昭和に入る頃には「これからは粘土細工の競争」になると予測された⁶⁵⁾。

口述試験は短時間の試験であったが「I府県に於ける手工教育の中心となりこれを指導し得るだけの識見と人格を備へて居らなければならない」から、「成績は相当に重きをなす」⁶⁶⁾と考えられていた。また伊藤が「実技の力が少し位弱くてもこの人物なら大丈夫と云ふので目出度く合格する人もあるやうである」⁶⁷⁾と述べているように、必ずしも学力観のみを測るのではなく教師としての資質を見極める意味合いも強かったと思われる。

成績査定については評価基準などの情報は公にされることはなかったが、第50回（昭和4年）の本試験助手を務めた小野副手は次のように報告している。小野は試験に直接関わる立場ではないが試験委員や試験現場に最も近い人物であり、また自身が文検合格者でもあるためかなり成績査定の内実を伝えていると思われる。

成績査定は試験終了後に即日行われ、提出された成績品の仕上がり結果だけではなく製作過程の評価も重視され、成績品と3日間の審査表とを対照して合否が決定されたと云う。多羅数雄（第68回合格）は第1日目終了後に保管中の未成品が点検されている形跡を見つけ、採点はむしろ製作途中に行われると考える方が適切で、「完成する頃には、大概の及落は決定している筈だ」⁶⁸⁾とも書いている。この点については阿部も「他の学科は知らぬが此の学科の委員は出来上つた結果ばかりを窺て、其人の技量があるとかないとか評価しない」と製作過程の評価も重要視されることを示唆し、「其の仕事の方法と技術並びに其時間内に於ける能率の三方面から観る」と述べている⁶⁹⁾。

成績査定による成績上位者は「第一考査」で合格候補者となるが、その他の者については「再三再四審議」を行ってさらに候補者を選出し最終的な合格者を決定したという。小野副手はこの成績査定作業について「然し茲に一言付加して置くことは該試験方法は決して『厳格』の二字を以てするのではない、審査決定までには形容の出来ない程こまやかな温情が籠られていることを忘れてはならぬ」とし、「考査法が絶対厳格のみであるならば恐らく合格者は半減」と云う⁷⁰⁾。そして口述試験についても小野は「仮令題意を取違へたり、要点に触れて居なくても委員からは再び反問され務めて其の意に叶ふ様に仕向けてくれる」と云い、緊張の余り論点を外した回答を行った場合でも再質問などのフォローがあったと云う⁷¹⁾。

小野副手が報告した時期の文検全体の合格率は7%～8%台であったとされるが⁷²⁾、手工科に関しては60%台を維持していた⁷³⁾。この「他学科の合格率と比較」して手工科が「年々好成绩を示している」状況について小野は、「一つには受験者諸氏の努力の結晶の表れ」だが「他面に両先生の受験者への衷心からの同情の賜」があると解説している。仮に受験者が合否当落線上にあるような場合には「予備試験の成績を参照」したり、「将来伸び得る力ありと認めたるもの」あるいは「実地成績は少々不出来なれども教育意見の確実なもの」については「合格資格者として算せられるようである」と云っている⁷⁴⁾。

文検制度的には予備試験は本試験受験の学力を持つか否かを測る機能を持つと位置づけられていた⁷⁵⁾。このため教科によっては予備試験と本試験との間に多少のレベル差があるようだと推測されたが、受験対策誌は手工科については予備試験でも実技要素が含まれており両者間の難易度に差はないと解説し、実技に自信のある予備試験合格者なら「必ず本試に合格すると断言出来る」と述べている⁷⁶⁾。

なお受験者にとって最も知り得たい情報の一つに合否ラインがあるが、手工科を含め文検において合格点が公表されたことはない。このため種々の情報が出回ったと思われるが⁷⁷⁾、例えば手工科でも平均で60点以上なら合格圏内である⁷⁸⁾、あるいは他の問題が良くても図学が60点以下なら不合格、逆に他の問題が低得点でも図学が高得点であり、かつ平均して60点以上なら可能性が高まる⁷⁹⁾などがある。何れにしても難関である図学についての成績評価は受験者の関心事であったと思われる。

3. 試験委員と出題

明治33(1900)年の教員検定委員会官制(勅令第135号)による委員会は教員検定委員長と常任委員、各年度ごとに任命される臨時試験委員で構成された。判明した歴代の手工科の臨時試験委員を表2に示すが、これらは全て東京高等師範学校関係者である。

表2 文検手工科臨時試験委員

回	実施年	委員名
5	明治24	後藤牧太
6-14	明治26-33	後藤牧太、上原六四郎
19-25	明治38-44	上原六四郎、岡山秀吉
26	大正1	岡山秀吉、阿部七五三吉 ⁸⁰⁾
27	大正2	後藤牧太、阿部七五三吉
28-50	大正3-昭和4	岡山秀吉、阿部七五三吉、内海静*
52-56	昭和5-7	岡山秀吉、阿部七五三吉、伊藤信一郎
58-62	昭和8-10	阿部七五三吉、伊藤信一郎
64-66	昭和11-12	阿部七五三吉、伊藤信一郎、三苦正雄
68-70	昭和13-14	阿部七五三吉、三苦正雄、松原郁二
72-76	昭和15-17	三苦正雄、松原郁二、板倉賛治

*一部年度については未確認

文検の出題は試験委員の裁量に委ねられていたとされるため、受験者には試験委員と出題内容の関わりについて高い関心がみられるが、数学や歴史などいくつかの学科目では試験委員の学説と出題内容との間に関連性が見られると云う⁸¹⁾。受験対策誌では「問題は試験委員の方々の傾向が著しく現れて来る」⁸²⁾あるいは「問題提出者は試験委員で、(中略)その委員の個性を没却して試験は出来得るものではない」として「参考書の選定は第一に『委員の著書の研究』に初まる」⁸³⁾や「其の委員の著者や雑誌の論説等によつて、なるべく其の人の学説を知つておくのが、受験的に利益」⁸⁴⁾、「試験委員の著書に親しむことは、非常に有利である」⁸⁵⁾などと解説している。従つて「検定委員の更迭は受験者の浮沈に関する重大問題である」⁸⁶⁾と信じられ、このため「試験委員の更迭が発表されると、急に慌てて新委員の著書を血眼になつて探し廻る」例もあったと云う⁸⁷⁾。

手工科でもこの点については「委員諸氏の著書に親しみ学説を知る事は極めて大切である」⁸⁸⁾とされ、受験者手記にも「手工研究等にて試験委員の論説」⁸⁹⁾に注意したとか、「試験委員は如何なる態度であるかと言ふお考えをまとめて置く必要があります」⁹⁰⁾あるいは「委員三先生の著書はぜひとも皆一読を要する」⁹¹⁾としている。ただ他方で「本科の研究家は非常に少なく(中略)各著書の内容は共通部分が多い」⁹²⁾と試験委員の手工教育論に大差はないと一般に理解されていた。試験委員の学説と試験問題との関わりについては、個人的学説についての詳細な比較研究を行っていない現段階では速断できないが、出題傾向を左右する大きな要因にはならなかったと考えられる。木工、金工などの技術的知識や技能的側面の扱いに関しては試験委員による変異は考えにくい。その一方で筆記、口述では工業化進展に伴う技術教育充実の要望や実業教育論、大正自由教育に代表される教育思潮などの時代的背景が反映されたと思われる。

なお文検手工科では歴代試験委員の出身母体は限定されていたし、何と云つても文検期間中の半分以上にわたり試験委員を務めた岡山秀吉の影響力は大きく、このため出題傾向はほぼ一貫していたと考えられる。また文検出題者と高等師範学校教授陣そして中学校用教科書(師範学校関係)執筆者とが重なる。従つて出題、とくに実技の題材は三者の関係をおのずと反映することになり、ひいてはこれが出題形式の固定化傾向につながる結果となつたとも思われる。

4. まとめ

本稿では予備試験と本試験の実施要領や試験の実状、成績査定の内実などについて焦点化して考察を行った。約50年の長期間に渡った文検手工科の実態は把握しにくい、手工研究誌および受験対策誌に掲載された試験委員の談話や受験指導記、受験者の手記などを手がかりに断章取義に陥らないよう配慮し集積した結果から以下のようにおおよその形が見えてきた。

第一は成績の一般的な傾向についてである。成績は予備試験では実技に関する知識、教授法関連、製図、図案の順で、また本試験は木工、金工、粘土細工の順にそれぞれ悪く、この中で予備試験の製図、本試験の金工が合否を分けると考えられていた。

第二は木工と金工にみられた特徴的な試験方法である。試験時間は木工、金工の別に一応定められていたものの、両科目間では持ち時間の流用が認められていた。このため余剰が生じた科目の時間は時間の不足する科目に回すことができ、結果的に両科目の設定時間を合算した時間内に終了すればよいことになっていた。

第三は試験の配点や評価基準などについてである。合否に関わる公表資料は見当たらないため査定については試験委員談話などから推察するほか無いが、本試験では加工方法、加工技術、作業効率が評価対象でその外に途中過程も重要視するなど多面的な評価が行われ、全体的には絶対評価の考えで査定されたと考えられる。ただその一方で合否線上にある場合にはかなり柔軟性を持った対応もなされていたものと思われる。

第四は試験委員の学説と試験問題との関わりについてである。文検手工科では個人的学説が出題内容に反映された云うよりは、むしろ産業構造変革に伴う技術教育充実などの社会的要望や時々の教育思潮など手工科を取り巻く時代の趨勢の影響が大きいと思われる。

以上のように文検手工科の試験の実態についてのおおよその輪郭を把握できたが、注目すべきは厳正中立である査定においても、口述試験などを介して人為的要素の入る余地を残していたと思われる点である。これは教科の教育理論に通暁し技術的能力にも優れた人物の選考を当然としながらも、なおそのうえで教育者としての人格と才幹を持ちながら市井に埋もれている、多少荒削りであっても将来性のある逸材の発掘を期待したためではないかと推測できる。手工科では中等教員の需要が限定的であったこともありその養成はほぼ東京高等師範学校に委ねられていた。他教科のように多様な養成ルートを持たない手工科では、いわゆる師範型の枠に囚われない新しい風を吹き込む可能性を秘めたこの人材発掘機能こそ、あるいは手工科が文検システムに最も期待した点であったのかも知れない。

なお紙幅の関係で触れることができなかつた独学者の受験対応の実態などについては紙面を改めたい。

註

- 1) 昭和7（1832）年の文部省令第15号による教員検定規定改正時に師範学校中学校高等女学校教員検定規定の中に「師範学校専攻科並二高等女学校高等科及専攻科教員ノ検定」（俗称、文検専攻科）が追加されている。文検専攻科（家事、裁縫）は予備試験を行わなかつた（官報 第1701号 昭和7.8.30 p.833）
- 2) 官報 第7093号 p.627 明治40.2.23
- 3) 官報 第7094号 p.684 明治40.2.25
- 4) 官報 第7219号 p.549 明治40.7.23

- 5) 官報 第7293号 pp.505-507 明治40.10.19
- 6) 官報 第7317号 明治40.11.16 その他第7316、7323、7324、7326、7330、7331、7333号などに継続発表
- 7) 官報 第6793号 明治39.2.23 第7094号 明治40.2.25 第7095号 明治40.2.26 第7386号 明治41.2.13
- 8) 官報 第7121号 p.746 明治40.3.24
- 9) 手工研究 第106号 pp.16-30 昭和4(1929)
- 10) 宮崎、澤本、平田 戦前における手工科の中等教員検定試験について(2) 山口大学教育学部 研究論叢 第61巻 第3部 平成23(2011)
- 11) 宮崎、澤本、平田 戦前における手工科の中等教員検定試験について(3) 山口大学教育学部研究論叢 第62巻 第3部 平成24(2012)
- 12) 同上 10)
- 13) 官報 第3840号 大正14.6.12 p.323
- 14) 手工研究 第221号 p.53 昭和13(1938)
- 15) 手工研究 第106号 p.19 昭和4(1929)
- 16) 教育学術界 第47巻 第1号 p.45 大正12(1923)
- 17) 手工研究 第135号 p.43 昭和6(1931)
- 18) 文教書院編 中等教員・実業教員・高等教員文検受験要覧 p.459 大正14(1925) 文教書院
- 19) 文検の実状は行友伴輔(第46回(昭和2年)合格)の手記によっても垣間見ることができ、本試験第一日目の木工では以下のように報告している。7月5日午前8時、高等師範学校金工室に受験者23名が集合して試験委員に伴われて木工室に移動し、あらかじめ作業工具一式が準備された作業台を抽選によって決定した。試験開始後、工作図の製図に40分、工具の手入れに40分を費やした後に作業に取りかかり午後3時に試験を終了している。このときの試験では作品は翌日まで提出が猶予されている。これは試験科目間の試験時間の流用が認められていたことの表れであろうが、実際に何時間を流用したのかは手記からは読み取れない。二日目の金工は金工室で抽選により作業場所を決定して午後3時半に試験を終了し、終了後に金工と木工の成績品を提出している。三日目の粘土細工では試験中に口頭試問が行われた。試験委員室に入室後に、机上に用意された問題に対して1分間の熟読時間を与えられた後、3分間での解答を求められたと云う。午前11時半の試験終了に伴い成績品を提出し3日間の試験を終えている。(手工研究 第86号 pp.14-18 昭和2(1927))
- 20) 手工研究 第106号 p.19 昭和4(1929)
- 21) 手工研究 第111号 p.17 昭和4(1929)
- 22) 国民教育会編 文検中等教員各科受験法 p.434 大正3(1914) 国民教育会出版
- 23) 官報 第1634号 p.331 昭和7.6.13
- 24) 手工研究 第197号 p.49 昭和11(1936)
- 25) 具体的な実施状況について第50回(昭和4年)の例でみると以下のようなものである。
木工では額縁が出題されたが、工具は高等師範学校の学生用から「平鉋(寸六)二、台廻鉋(寸六)一、両刃鋸(八寸)一、向待鑿(二分)一、薄鑿(四分)一、鎚鑿(一分)一、筋罫引一、直角定規一、下端定規一、木槌一、竹尺一、砥石(荒・中・仕上)各一」が独用工具として、またその他に共用工具として「溝鉋、螺旋廻、四ツ目」が準備された。木工の材

料は「尺幅厚さ正寸二、長さ二尺」のセン材が一枚、裏板用に「シナ三枚張ベニヤ板」が一枚、その他に「真鍮木螺旋」が四本、「研磨紙方二寸位のもの」が一枚、「製図用紙（画用紙四ツ切）」が二枚それぞれに準備され、また標本が提示された。金工では火箸と金盞が出題されたが、工具は教室備え付け工具の他に各自に「十吋中目鑿の新品」が一個、また材料は「三分丸鍛鉄長さ七寸のもの」が二本と「ブリキ板」が一枚与えられた。粘土細工は「粘土彫刻用具」として「粘土板一、厚さ定規一組、丸棒一、粘土篋三（竹並製品）、湿布一」が準備された（手工研究 第111号 pp.17-25 昭和4（1929））

- 26) 手工研究 第221号 p.53 昭和13（1938）
- 27) 現代實際教育研究会 現代實際教育大系第9巻図画手工科篇 p.286 昭和2（1927）章華社
- 28) 手工研究 第63号 p.20 大正14（1925）
- 29) 文検研究会編 文部検定中等教員各科受験者の手引 p.534 大正13（1924）大同館
- 30) 手工研究 第86号 p.9 昭和2（1927）
- 31) 現代實際教育研究会 現代實際教育大系第9巻図画手工科篇 p.284 昭和2（1927）章華社
- 32) 泰山堂編輯部編 泰山堂独学受験案内第十三編 中等教員検定総覧 pp.267-269 大正14（1926）泰山堂
- 33) 文検研究会編 文部検定中等教員各科受験者の手引 p.534 大正13（1924）大同館
- 34) 同上 p.535
- 35) 同上
- 36) 伊藤信一郎 手工科の予備試験と其の感想 文検世界 昭和7（1932）
- 37) 泰山堂編輯部編 泰山堂独学受験案内第十三編 中等教員検定総覧 pp.267-269 大正14（1925）泰山堂
- 38) 手工研究 第106号 p.17 昭和4（1929）
- 39) 文検研究会編 文部検定中等教員各科受験者の手引 p.534 大正13（1924）大同館
- 40) 同上 p.535
- 41) 手工研究 第86号 p.9 昭和2（1927）
- 42) 伊藤信一郎 手工科の予備試験と其の感想 文検世界 昭和7（1932）
- 43) 手工研究 第86号 p.9 昭和2（1927）
- 44) 文検研究会編 文部検定中等教員各科受験者の手引 p.555 大正13（1924）大同館
- 45) 教育学术界 第47巻 第1号 p.44 大正12（1923）
- 46) 国民教育会編 文検中等教員各科受験法 p.572 大正4（1915）国民教育会出版
- 47) 製図の規格化は昭和8（1933）年の商工省告示第59号による製図規格第119号に始まる（官報 第2025号 昭和8.9.29）
- 48) 国民教育会編 文検中等教員各科受験法 p.573 大正4（1915）国民教育会出版
- 49) 文検研究会編 文部検定中等教員各科受験者の手引 p.537 大正13（1924）大同館
- 50) 手工研究 第63号 p.20 大正14（1925）
- 51) 手工研究 第63号 pp.20-22 大正14（1925）
- 52) 手工研究 第86号 pp.11-12 昭和2（1927）
- 53) 文検研究会編 文部検定中等教員各科受験者の手引 p.539 大正13（1924）大同館
- 54) 長谷川有太郎編 文検受験の栞 p.200 大正11（1922）明治図書
- 55) 国民教育会編 文検中等教員各科受験法 p.436 大正4（1915）国民教育会出版

- 56) 手工研究 第63号 pp.20-22 大正14 (1925)
- 57) 手工研究 第86号 pp.11-12 昭和2 (1927)
- 58) 文検研究会編 文部検定中等教員各科受験者の手引 p.537 大正13 (1924) 大同館
- 59) 現代實際教育研究会 現代實際教育大系第9巻図画手工科篇 p.286 昭和2 (1927) 章華社
- 60) 文検研究会編 文部検定中等教員各科受験者の手引 p.538 大正13 (1924) 大同館
- 61) 同上 p.537
- 62) 伊藤信一郎 手工研究 第62号 p.20 大正14 (1925)
- 63) 手工研究 第86号 p.11-12 昭和2 (1927)
- 64) 手工研究 第63号 pp.20-22 大正14 (1925)
- 65) 手工研究 第86号 pp.11-12 昭和2 (1927)
- 66) 同上
- 67) 手工研究 第63号 p.20 大正14 (1925)
- 68) 手工研究 第221号 p.53 昭和13 (1938)
- 69) 教育学術界 第47巻第1号 p.45 大正12 (1923)
- 70) 手工研究 第111号 p.27 昭和4 (1929)
- 71) 同上
- 72) 寺崎昌男・「文検」研究会編 「文検」試験問題の研究-戦前『中等教員に期待された専門・教職教養と学習 p.527 平成15 (2003) 学文社
- 73) 宮崎、澤本、平田 戦前における手工科の中等教員養成制度について(1) 山口大学教育学部研究論叢 第60巻 3部 平成22(2010)
- 74) 手工研究 第111号 p.27 昭和4 (1929)
- 75) 英語では予備試験は読み書きなどの基本的学力、本試験は聞く話すの音声面と試験目的が異なっていたと云う(寺崎昌男・「文検」研究会編 「文検」試験問題の研究-戦前『中等教員に期待された専門・教職教養と学習 p.61 平成15 (2003) 学文社)
- 76) 村田良三 文検手工科の新研究 p.5 昭和11 (1936) 文泉堂書房
- 77) 国語では「委員諸氏の口から聞いた所を総合すると(中略)平均六十点あればよい」などがある(大月静夫 最新指導文検国語科受験法 p.18 昭和4 (1929) 大同館書店)
- 78) 文検手工科の新研究 村田良三 p.4 昭和11 (1936) 文泉堂書房、日高長平 文部省検定手工科受験準備の指針 p.32 昭和6 (1931) 啓文社書店
- 79) 村田良三 文検手工科の新研究 p.4 昭和11 (1936) 文泉堂書房
- 80) 岡山、阿部は文検「手芸」の試験委員も務めている。この点については別の視点からの考察が求められる
- 81) 「文検」試験問題の研究-戦前『中等教員に期待された専門・教職教養と学習 寺崎昌男・「文検」研究会編 p.363 平成15 (2003) 学文社
- 82) 松田友吉 最新指導文検修身科受験法 p.20 昭和5 (1930) 大同館書店
- 83) 松田友吉 上京と文検 pp.220-221 昭和3 (1928) 厚生閣書店
- 84) 大月静夫 最新指導文検国語科受験法 p.16 昭和4 (1929) 大同館書店
- 85) 「受験と学生」編纂部編 中等教員検定試験受験案内 p.89 昭和15 (1940) 研究社
- 86) 宮内弥助 最新指導文検歴史科受験法 p.16 昭和8 (1933) 大同館書店
- 87) 「受験と学生」編纂部編 中等教員検定試験受験案内 p.95 昭和15 (1940) 研究社
- 88) 安達久 文部省検定教科受験準備の指導 p.35 昭和10 (1935) 啓文社書店

- 89) 手工研究 第195号 p.48 昭和11 (1936)
- 90) 手工研究 第185号 p.44 昭和10 (1935)
- 91) 手工研究 第202号 p.50 昭和12 (1937)
- 92) 文検研究会編 文部検定中等教員各科受験者の手引 p.551 大正13 (1924) 大同館